

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H03440

研究課題名(和文) シリア内戦の比較研究 レバノン・旧ユーゴスラビアの内戦と戦後和解

研究課題名(英文) Syrian Civil War in Comparative Perspective: Wars and Reconciliation Processes of Lebanon and Former Yugoslavia

研究代表者

黒木 英充 (Kuroki, Hidemitsu)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：20195580

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：シリア内戦の性格の考察に当たり、同様にオスマン帝国支配を経験し、複合的人口をもつレバノンと旧ユーゴスラビアでの内戦と比較した。共通・連関する問題として、戦下の国土のcantonizationと新たな経済システムの出現、内戦主体のコネクティビティと外部勢力の介入による代理戦争化、武器や民兵の相互移転、国内外への強制移住と帰還の困難さが(シリアに関しては将来的な)戦後和解を困難にしていること、などが挙げられる。内戦では非正規軍組織が軍事行動の中心となるが、3内戦に留まらず、イラク戦争やウクライナ戦争でも非正規軍が大きな位置を占めており、より広範な暴力拡散による「世界内戦化」の危険性も浮上している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

シリア内戦はその急速な展開ゆえに短期的スパンで説明されることが多く、その長期的・歴史的な背景や他の内戦と関連付けて考察されることが少なかった。本研究はレバノンと旧ユーゴスラビアにおける過去の内戦とシリアのそれを比較することで、複合社会における暴力発現のメカニズムを一般的な形で明らかにするとともに、非正規軍(民兵)の歴史的な存在形態と現在の戦争における比重増大の問題点を指摘することに貢献できた。

研究成果の概要(英文)：Our comparative study examined the commonalities between the Syrian civil war and the civil wars fought in Lebanon and former Yugoslavia. Both Lebanon and Yugoslavia were extremely diverse nations that were, like Syria, subjected to centuries of Ottoman rule. Their shared and related issues included their wartime cantonization, the connectivity of their civil war agencies, the occurrence of proxy wars resulting from the intervention of external powers, the mutual transfer of arms and militias, and forced migrations within and outside their borders. The difficulties migrants confront in returning make post-war reconciliation arduous. Irregular military organizations have also functioned significantly in military operations such as the Iraq War and Ukraine War. This development indicates the trend to “de-monopolize” violence in modern states and posits the dangers of a potential “global civil war.”

研究分野：中東地域研究

キーワード：内戦 シリア レバノン ユーゴスラビア 比較 イスラーム 宗派紛争 民族紛争

### 1. 研究開始当初の背景

本科学研究は2017年秋に申請し、2018年4月に開始した。その段階で、2011年3月の地方都市における民衆の抗議行動に端を発したシリア内戦は7年が経過したところであった。それまで戦況を目まぐるしく変化させつつ、死者は20万人以上、負傷者はその数倍、国内外の難民・避難民は人口の約半数の1100万人にも上っており、「21世紀最大の人道問題」とされていた。一時センセーショナルな残虐行為で知られたIS(イスラーム国)は軍事的に無力化しつつあったが、内戦自体の終結と戦後の国家形態については見通せない状況であった。(そして2023年の現在もなお、シリアの国土は人口の大半が含まれる西部大都市地域がアサド政権側に、ユーフラテス河以東がアメリカの支援を受けたクルド人支配領域、北西部と北部国境地帯の一部がトルコの支援を受けた「反体制派」地域として、大きく3分割状態にあり、難民・避難民の大半は依然として元の居住地に帰還できない状況が続いている。)

この内戦による巨大な国家破綻の問題に対して、研究者はいかに取り組むべきか。7年間の内戦期間を通じて蓄積された情報や知見を基に、それをより長期的かつ広域の歴史的文脈の中に位置づけて考究することが、「世界内戦」化する(土佐弘之『安全保障という逆説』2003)世界の現状と今後の見通しを得るために必須であると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、多面的なシリア内戦の実態を腑分けして学術的な光を当て、シリア内戦に関連・類似する二つの内戦(レバノン、旧ユーゴスラビア)と比較し、異同を明らかにしてシリア内戦のもつ特徴を描き出し、それら過去の内戦から得られる経験を生かして戦後シリア社会の再建に向けた提言を行うことであった。

については、シリア内戦は様々な側面をもち、その戦況と同様に目まぐるしく変化してきたことを踏まえ、独裁的政府と民主化運動、アラウィー派中心の少数派とワッハブ派の支援を受けるスンナ派、都市部の富裕層と都市郊外・農村部の貧困層、といった対立関係から米口、トルコ・イラン・サウジアラビアといった中東域外・域内の国際関係に直結する介入の側面のそれぞれを分析することが必要になる。

については、隣国レバノンの内戦(1975-90年)と旧ユーゴスラビア内戦(1991-2000年、そのうち特に1992-95年のボスニア内戦)であるが、いずれもシリア内戦との類似点と関連性が指摘できる。たとえば、6年以上の長期の継続;国内の諸勢力の割拠状態;米ソ(口)を初めとした国際的軍事介入といった3者共通点のほか、レバノン内戦にシリアが軍事介入し、戦後も治安・内政に介入し続けたこと、殉教主義を掲げるシーア派あるいはスンナ派のイスラーム過激派が民兵組織としてプレゼンスを占めた、といった点はシリア内戦とレバノン内戦に共通する点である。

については、レバノンは国土の統一が維持された(南部国境地帯はしばらくイスラエル占領下にあったものの)一方、旧ユーゴは6つの国家に分裂したが、そのなかで、シリアの来たるべき戦後社会における国民和解に資する要素があるかが問題となる。

### 3. 研究の方法

文献資料調査に加えて海外調査と国際会議による情報・知見の集積が主な方法であったが、その際に常に内戦における対立構造を考察するために、「多層構造モデル」を提示した。シリア内戦に関しては2011年にチュニジア、エジプトにて始まった市民革命の動きが多層を動かす動力となり、最深層はシリアの都市・農村の格差と都市への人口移動、国際介入のコンテクティブティ、近代的軍制とソーシャルモビリティ、新自由主義的経済の浸透、最も浅い層がテロリズム・不信仰者宣告のイデオロギー、といった層が設定され、それらの組み合わせによって表面の内戦時の対立断層線が様々に動くこととなった。このモデルの意味することは、いわゆる「モザイク社会」論ではなく、ダイナミックに変動する「万華鏡」論を示すことにある。

2018年度は東京にて国際会議“Syrian Civil War: Comparative Perspectives with Lebanese and Yugoslavian Civil Wars”を開催(2019年2月2日・明治大学)レバノン、米国、ロシアから研究者を招聘し、レバノン内戦下の人々の生活と生存、シリア難民をめぐる政治、国連のレバノン内戦・シリア内戦への介入の比較、ロシアの旧ユーゴスラビア内戦とシリア内戦への関与の変化と国際環境の変化の関係、といった問題が論じられた。

2019年度はセルビアにて国際会議“Lebanese, Yugoslavian, and Syrian Civil Wars and their Aftermath”(2019年9月12日・ベオグラード・国立現代史研究所)を開催し、日本、セルビア、レバノン、シンガポール(のレバノン人)、ロシア、マケドニアの研究者がそれぞれの体験と研究活動双方から生まれてくる知見を披露しつつ、内戦の過程と戦後の和解(とその不全)について、率直に議論する機会を持った。

その後、2020年初めからCOVID-19による(とりわけこうした海外調査中心の)科研活動の事実上の休止を余儀なくされる期間が生じ、2022年にようやくレバノンにて国際会議“Middle Eastern, Balkan and Japanese perspectives on the global and regional impacts of the

Ukraine War” (2022年9月7日・ベイルート・中東研究日本センター)を開催した。COVID-19による中断期間中に発生・深刻化したウクライナ危機は、2022年2月にロシアによるウクライナ侵攻という形をとって不幸なる結末を迎え(そしていま現在も進行中でますます深刻化している)この危機・戦争がシリア内戦と部分的に並行していることと、ロシアによる侵攻であることから、シリア内戦と密接に関連していることが明らかなため、課題を拡張する形で本国際会議を企画した。日本、レバノン、トルコ、ギリシア、セルビアの研究者がこの問題を様々な角度からとらえて議論する機会となった。

#### 4. 研究成果

本研究を通じて新たに明らかになったのは次の諸点である。

3内戦が発生し、それぞれ長期にわたり、独自の多層構造のダイナミズムに従って変異を遂げてきたことを踏まえたうえで、3内戦の共通性や関連性を重視する立場をとった。その結果、

3内戦が時期的にレバノンと旧ユーゴスラビアがほぼ連続して発生し、旧ユーゴスラビアとシリアが2000年から2011年まで10年以上間隔があるとはいえ、その間のイラク戦争(2003年とその後の内戦)やグルジア戦争(2008年)といった近隣地域の戦争とその前後の危機を考慮すれば、長い目で見たときに地下水脈のごとき連関がある。

たとえば、レバノン内戦終結後、過剰に蓄積された武器が旧ユーゴに流れ、その内戦終結後、シリアに「還流」したと見られること。また3内戦の全てにおいて、スナイパー(狙撃手)が都市環境の中で暗躍し、その攻撃から市民が身を守るために、道路上に大型の目隠し用横断幕をカーテンのごとく張り巡らし、視覚を阻害する動きが見られるという、共通の現象が出現した。

ウクライナ戦争まで連関に関する考察を引き延ばせば、シリア反体制派から民兵が一部ウクライナ側に「義勇兵」として移動する一方、シリア政権側支配地域においてロシアに戦争協力するべく民兵徴募がなされ、武器のみならず人的な移動が展開した。それはレバノン内戦における周辺地域からの戦力動員、旧ユーゴ内戦における同様の人的・資金的な周辺からの流入、シリア内戦における人的・経済的支援に関する外部アクターの圧倒的多数性として、「介入」の観点から連続的に観察された。戦争主体が外部勢力と活発に関係構築するコネクティビティの強さのゆえであり、3内戦のいずれも何らかの形で代理戦争化した。

3内戦全てにおいて、国内が多数の民兵政治勢力による分割割拠状態(cantonization)が進行し、人の移動制限の形態(チェックポイント設置)やカントン毎の新たな経済単位が出現して内戦状態の継続により利益を得る勢力が出現し、内戦長期化の一因になった。

3内戦とウクライナ戦争を含め、改めて非正規軍の役割が増大の一途をたどっていること。これは「内戦」状況であればあまりにも当然なことではあるが、レバノンにおけるヒズブラーやウクライナにおけるアゾフ大隊のような非正規軍組織が、局面においては正規軍と同等あるいはそれを上回るような重要な役割を果たすことのほか、イラク戦争における米 Black Water 社、ウクライナ戦争におけるロシアの Wagner のような民間軍事会社が軍事大国の正規軍の補完的役割を果たしつつ、非公式な政治力も強化する現実を示している。

とりわけ旧ユーゴスラビア内戦以降に明確化したことであるが、広告代理店等が内戦の姿を表象するキャッチコピーを創り出し(典型的なのが「エスニック・クレンジング」)イメージの方向付けを行う情報戦あるいはさらに進んだ認知戦のレベルにまで達していると言える。

2011年段階のシリア人口の半分が国外もしくは国内で強制移住を余儀なくされ、国家再建の道は極めて厳しい。難民の帰還問題を見通すに当たり、レバノンと旧ユーゴスラビアの例を比較するならば、前者の場合は、小国(日本の大型県レベルの面積)の統一が保たれたが、国内避難民となった人々の元居住地への帰還が別の避難民の居住により困難となる例が多数あり、戦後の居住の現実を受け容れざるを得ない状況がある。後者の場合は、基本的に国土が民族ごとに分裂して独立したことから、戦中の強制移住者がそれぞれの移動先に定着せざるを得ないこととなった。この条件下での「戦後和解」は当然ながら短期間では不可能である。

レバノン内戦の多層構造の大きな部分を占める「宗派体制」のあり方(宗派毎の縦割り体制)旧ユーゴスラビアの地域毎の民族分布状況、シリアにおけるクルド人やアラウィー派といった民族・宗派集団の地理的分布の偏り、といった点に鑑みれば、当然の帰結として、国や地域の広義のエスニックな構成、すなわち人口問題が前面に出ることとなる。第一次世界大戦後の国家形成における「民族自決」原則が必然的に招来する population politics の要素は、古くから議論されてきた東方問題 Eastern Question の重要なテーマであるが、3内戦とウクライナ戦争に至るまでこの文脈上に位置づけ可能である。多様な民族・宗派人口を包摂する国家のあり方をめぐるこの根本問題を解決しない限り、内戦的暴力はなくならないであろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 黒木英充	4. 巻 714
2. 論文標題 世界に広がるアラブ移民	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史と地理 世界史の研究	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木英充	4. 巻 15(6)
2. 論文標題 なぜシリア内戦は終わらないのか 大国の戦場になるシリア	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 DAYS JAPAN	6. 最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木英充	4. 巻 976
2. 論文標題 コメント1（2018年度歴史学研究会大会・全体会「戦争を検証する」）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 18-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kenichiro Takao	4. 巻 29
2. 論文標題 Promotion of Virtue and Prevention of Vice as the Founding Ideology for Saudi Arabia and Iran	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学習院女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kenichiro Takao	4. 巻 11
2. 論文標題 Policing Public Morality in Modern Muslim Societies: 'Religious Police' in Saudi Arabia, 'Islamic State' and Aceh	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 イスラーム地域研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 3-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kenichiro Takao	4. 巻 3
2. 論文標題 Sufism between Politics and Spirituality: Shaykh Ahmad Kufjaru and Syrian Ba'th	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series	6. 最初と最後の頁 203-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高尾賢一郎	4. 巻 92
2. 論文標題 建国思想としての勸善懲悪ーサウジアラビアとイランを事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 258-259
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高尾賢一郎	4. 巻 534
2. 論文標題 サウジアラビアにおける「変革」と宗教界	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中東研究	6. 最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐原徹哉	4. 巻 14
2. 論文標題 アゾフ・ノート ウクライナ戦争とパラミタリー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際武器移転史	6. 最初と最後の頁 75-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計31件 (うち招待講演 16件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 疫病と社会 レバノンが直面する困難と将来
3. 学会等名 第228回広島大学平和センター研究会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 疫病により試される社会のカー近現代のシリア・レバノンから
3. 学会等名 新学術領域研究「グローバル関係学」連続ウェブ・セミナー「新型コロナウイルスと中東」 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 レバノン・シリア移民のコネクティビティと信頼構築
3. 学会等名 学術変革研究「イスラーム信頼学」A03・B01ワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 書評コメント
3. 学会等名 岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始記念Book Launch Series 7 「第2巻『「境界」に現れる危機』を語る」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐原徹哉
2. 発表標題 書評コメント
3. 学会等名 岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始記念Book Launch Series 7 「第2巻『「境界」に現れる危機』を語る」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐原徹哉
2. 発表標題 フランスの『反分離主義法案』がもたらした国際的波紋：穏健派イスラム主義者をエンパワーすることはサラフ主義の抑制につながるか？
3. 学会等名 ワークショップ「「イスラム主義」の波紋：フィリピン南部とフランスの事例」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐原徹哉
2. 発表標題 コメント
3. 学会等名 ワークショップ「条約体制と国際法」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hidemitsu Kuroki
2. 発表標題 Dragomanity: Multiple Belonging and Multi-Faceted Strategy for Survival and Prosperity
3. 学会等名 6th meeting of the project “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hidemitsu Kuroki
2. 発表標題 Preamble
3. 学会等名 Workshop “Syrian Civil War: Comparative Perspectives with Lebanese and Yugoslavian Civil Wars” (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hidemitsu Kuroki
2. 発表標題 Historical Buildings and Community
3. 学会等名 Symposium “The Silk Road Friendship Project: Saving Syrian Cultural Heritage for the Next Generation” (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 シリア内戦と「対テロ戦争」
3. 学会等名 第219回 広島大学平和センター研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 オスマン後期・騒乱頻発期のアレppoの都市構造と都市民
3. 学会等名 新学術領域「都市文明の本質」C01 計画研究05・06第1回合同研究会「都市アレppoの歴史と現在」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 「対テロ戦争」とイスラーム
3. 学会等名 東京外国語大学夏期世界史セミナー・世界史の最前線（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 コメント
3. 学会等名 2018年度歴史学研究会大会全体会「戦争を検証する 「9.11事件」の歴史化をめざして」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 シリア内戦から見える世界
3. 学会等名 国立大学共同利用・共同研究拠点協議会第74回「知の拠点セミナー」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tetsuya Sahara
2. 発表標題 Comment
3. 学会等名 Workshop “ Syrian Civil War: Comparative Perspectives with Lebanese and Yugoslavian Civil Wars ” ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高尾賢一郎
2. 発表標題 現代シリアのウラマー・スーフィーによるウズベキスタン・リビアとの交流 アフマド・クフターローとラマダーン・ブーティの事例
3. 学会等名 NIHU研究推進・現代中東地域研究 平成30年度次世代共同研究 「現代ムスリム知識人の地域横断ネットワークに関する研究 ウズベキスタン・シリア・リビアのウラマー・スーフィーの交流を中心に」第2回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高尾賢一郎
2. 発表標題 建国思想としての勸善懲惡 - サウジアラビアとイランを事例に
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hidemitsu Kuroki
2. 発表標題 The Syrian Civil War in Comparison with the Lebanese and Yugoslavian Civil Wars
3. 学会等名 Annual Meeting of Korean Association for Middle East Studies ( 招待講演 ) ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 世界の内戦を考える レバノン、ユーゴスラビア、シリアを事例に
3. 学会等名 第223回 広島大学平和センター研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hidemitsu Kuroki
2. 発表標題 A Far Dwelling Friend is Better than a Near Kinsman?: The Structure of the Eastern Question and the Russian Involvement in the Syrian Civil War
3. 学会等名 第10回ロシア・ユーラシア東アジア大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hidemitsu Kuroki
2. 発表標題 Multilayered and Interactive Networks of Syrian and Lebanese Diaspora: A Historical Perspective
3. 学会等名 The First International Conference: Phenomena of Neo Diaspora in Post Arab Spring” Hankuk University of Foreign Studies（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 中東地域との危険な共鳴
3. 学会等名 オンラインシンポジウム ウクライナ戦争の背景とその波紋：我々は今どこにいるのか
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐原徹哉
2. 発表標題 ウクライナ侵略と世界の多極化
3. 学会等名 オンラインシンポジウム ウクライナ戦争の背景とその波紋：我々は今どこにいるのか
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 シリア内戦とウクライナ戦争
3. 学会等名 第236回広島大学平和センター研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 黒木英充
2. 発表標題 21世紀の東方問題 アフガニスタンからウクライナへ
3. 学会等名 第41回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hidemitsu Kuroki
2. 発表標題 Opening Remarks
3. 学会等名 Symposium "Lebanese, Yugoslavian, and Syrian Civil Wars and their Aftermath"（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kenichiro Takao
2. 発表標題 Jihadist Genealogy in Modern Syria: From the Muslim Brotherhood to ISIL
3. 学会等名 Symposium “Lebanese, Yugoslavian, and Syrian Civil Wars and their Aftermath” (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hidemitsu Kuroki
2. 発表標題 Welcome remarks and preamble
3. 学会等名 International Conference “Middle Eastern, Balkan and Japanese perspectives on the global and regional impacts of the Ukraine War” (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tetsuya Sahara
2. 発表標題 “Honor and Manhood in Contemporary Paramilitarism in the Balkans and Caucasus”
3. 学会等名 International Conference “Middle Eastern, Balkan and Japanese perspectives on the global and regional impacts of the Ukraine War” (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kenichiro Takao
2. 発表標題 The present and prospect of the global jihadists
3. 学会等名 International Conference “Middle Eastern, Balkan and Japanese perspectives on the global and regional impacts of the Ukraine War” (国際学会)
4. 発表年 2022年

## 〔図書〕 計11件

1. 著者名 鈴木董・近藤二郎・赤堀雅幸編、黒木英充項目執筆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 826
3. 書名 中東・オリエント文化事典（項目：「アラブ圏」、「レバノン内戦と宗派体制」）	
1. 著者名 山田朗・師井勇一編、佐原徹哉ほか章執筆	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 212
3. 書名 平和創造学への道案内（第8章 現代の戦争）	
1. 著者名 Ayse Kayapinar, ed., Tetsuya Sahara et al.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Corlu Belediyesi Yayinlari	5. 総ページ数 748
3. 書名 1989 Yilinda Bulgaristan'dan Turk Zorunlu Gocunun 30 Yili (Recent Waves of Refugees and Xenophobic Nationalist Voices in Bulgaria)	
1. 著者名 Hidemitsu Kuroki (ed.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies	5. 総ページ数 280
3. 書名 Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2: Tehran, Cairo, Istanbul, Aleppo, and Beirut	

1. 著者名 Hidemitsu Kuroki (ed. Antranik Dakessian)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Haigazian University Press	5. 総ページ数 718
3. 書名 Armenians of Syria: Proceedings of the Conference (24-27 May 2015)	

1. 著者名 黒木英充 (山口昭彦編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 352
3. 書名 クルド人を知るための55章	

1. 著者名 Tetsuya Sahra (eds. John Dixon & Max J. Skidmore)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Westphalia Press	5. 総ページ数 345
3. 書名 Donald Trump 's Presidency, International Perspectives	

1. 著者名 高尾賢一郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 亜紀書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 イスラーム宗教警察	

1. 著者名 高尾賢一郎 (高岡豊・溝淵正季編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 323
3. 書名 「アラブの春」以後のイスラーム主義運動	

1. 著者名 黒木英充 (永原陽子編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 人々がつなぐ世界史	

1. 著者名 Hidemitsu Kuroki (ed. Yohei Kondo)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies	5. 総ページ数 204
3. 書名 Survival Strategies of Minorities in the Middle East: Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐原 哲也  (Sahara Tetsuya)  (70254125)	明治大学・政治経済学部・専任教授    (32682)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高尾 賢一郎  (Takao Kenichiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 Syrian Civil War: Comparative Perspectives with Lebanese and Yugoslavian Civil Wars	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Lebanese, Yugoslavian, and Syrian Civil Wars and their Aftermath	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Middle Eastern, Balkan and Japanese perspectives on the global and regional impacts of the Ukraine War	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関